

今を大切に生きること

佐藤 光

私が、大切にしていきたいことは「今を大切にいきること」ということです。

東日本大震災を経験してから、私の中で「平常」というものがなんなのかがよくわからなくなりました。自分が「平常」だと思っただいたものが、実はあっけなくかわってしまいうこととを目の前で、沢山見たからです。すぐに変わってしまふのなら、それは平常とは言わないのでは無いでしょうか？

当たり前なものなど何もないのかもかもしれません。今まで存在していた人間、あつたはずの家、あつたはずの道路、あつたはずの町並み、あつたはずの生活、それらがあんなにもあっけなく波にさらわれていく様子は、まさか現実のものとも思えず、テレビの画面を通してみていると映画かなにかのシーンのようです。

大地震の直後、学校にむかえに来ていた母

と私と妹は、なんとか家に帰りました。電気はもう切れていました。私はその時まで、停電すら経験したことがなかったのです。母は水がでるうちに、といてそいで水をくみはじめました。私は、いそいで母に言われるままに手伝うだけです。余震が続く中、急に津波がくるかもしれないしね。大きな地震にあうかもしれない。何かあった時、これだけかわかるように。と母が私と妹の下着に、マジックで名前と電話番号を書いてから出かけたことを私は一生忘れないだろうと思います。

津波のあと、わたしたちの春休みはなかなかおわりませんでした。短いはずの春休みはいつまでたっても終わらそうがありませんでした。空をみあげると飛行機が何機もとんでいて、道をとおっているのは沢山の自衛隊の車。急にかわってしまっただ世界に、私はただただながされるままです。真、暗な夜、おふろもはいれませぬ。お店で買い物をするため

何時間も何時間も列になればなかりません。それだけならんでも、買えるものはきまっています。私のお父さんは、釜石で働いています。電話も通じず、ガシキに道路をふさがれていて、連絡をとる方法もありません。お父さんが生きているのかしんでいるのかもわからないままでした。

震災前、お父さんと最後に話した話はなんただったけ？

今まで当然だったものは、なにも当然ではなかった事がじよじよにわかってきました。

長い長い春休みのはじめりでした。私の家は山の方にあるので、ぶじでした。学校の友達や、近所の様子も一見すると、何も前とかわっていないようです。でも、私と妹は母についていろいろなところに行ったので、学校の友だちよりも津波のひどさを目の当たりにしたと思います。焼け野原の光景、見つかる死体、泣き叫ぶ人。そんな生活がつづくうちむしろそっちの方が日常に感じてくるのでし

た。前の生活の方が、昔みた夢だったような
感覚。日にちを重ねるうちに、現実こそが日
常になるのです。

だからこそ、今この現実を大事にすること
です。

いつも当然のようになっていた電気。

いつ行っても、ものであふれていたスーパ
ー。何時でも開いているコンビニ。

ガソリンスタンドにガソリンはあるはずだし
蛇口をひねれば水は出るはずでした。長い長

い列に並んで、水ももらうことなんて、なか
ったはずだったのです。

学校に行くのも当然でした。

いつもあったものは、いつなくしてしま
うかもしれないものなのです。当然だと思
っていたものは、かけがえのないものだ
ったのです。またいつなくすか知れない
けれど、その時、その時を大切に
して生きていくこと。

やっぱりとほしました学校は、とって
もとって、も楽しかったです。いやだ
と思っ、ていた勉強

なのに、勉強ですらとっでもうれしかったのです。震災前は、何気なくすごしていた学校生活。それがこの経験をして、学校にくるとがこんなにかげがえないものだったのだと思いました。

幸い、私の身近な人は無事で、家も無事でした。でも、沢山の知り合いが家をながされなくなりました。知り合いの中には、私よりちいさな子も何人かいます。その子たちが、今もうこの世にいないのだということはまだ真正面からかんがえられませんか。その現実をこうして字にして書く事はできても、心のそこでまだうけとめたりむきあったりすることは、できません。

でもせめて、今は、今この時、だけを懸命に生きることに専念することにしようと思うのです。いつ世の中はかわってしまいかしれません。確実なものなど何もないのですから、だから、今のこの時こそを確実にできるよう、今を大切に生きていきたい、そう思うのです。